

『学校の文化づくりと校長の指導性』

教育の根幹 ＝ “学校文化・学校風土の創造” に関わる視点から、校長のリーダーシップの発揮が求められている。学校にはいろいろな顔があるように、職員室にも独自の学校文化が存在する訳だが、今回は学校文化・学校風土の醸成と校長のリーダーシップとは何か考えてみたい。

1、個性と共通性

教育課程の編成・実施にあたり、子どもの“自分探しの旅”を援けるため、「今、日本の子どもにとって共通して身につけさせるべきものは何か」という『共通性』を踏まえながら、その上で「今、目の前にいる一人ひとりの子どもに何が必要か」という、『個性』と『主体性』を育てていくことが大切だ。

勿論、『共通性』か『個性』かと二者択一にとらえるものではなく、両者のバランスが大事なことは論を待たない。“自分探しの旅”は「個の確立」と「共に生きる」（共存・共栄）という両輪に支えられて前進していくものだと思っている。

ところが、「個」や「個性」を強調した教育の結果として「自分だけよければ…」「他人のことなどどうでもいい…」といった「わがまま」「利己主義」「過った個人主義」を生み出してきたという強い反省がある。

学校文化創造のために、以下のことを押さえて経営に当たってほしい。

2、求められる学校像として

《文化・風土は一日にして成らず》

校長のリーダーシップの発揮と言えども、一年や二年の取組みで即効は期待できない。少なくとも在職期間中はいい続けることが必要だ。下記のような学校になっているか、なりつつあるかを…。

- ①子ども達一人ひとりが伸び伸びと過ごせる場となっている
- ②「自分の興味・関心のあること」にじっくりと取り組める場が設けられている
- ③分かりやすい授業が展開され、分からない時は「分からない」と自然に言え、学習のつまづきや試行錯誤が当然なこととして受け入れられている

「教室は間違えるところ」と教室の正面上部に掲げている教室を見かけるが、「絵に描いたモチ」になってはいないか

④子ども同士、子どもと教師の信頼関係が確立し、子どもが安心して力を発揮できる場となっている

重ねて述べるが、留意すべきはただ一点。それは、学校、教職員の「文化・雰囲気・風土づくり」に対する心構えである。「分からないことが分からないと言える学校」「試行錯誤が認められる学校」「子どもが思いっきり自分を発揮できる学校」になっているかということに尽きる。

子どもが思いっきり自分を発揮でき、それを何よりも“先生が”喜び受け入れ、“友達も”お互いに認め励ましあう学校を「支持的風土の学校・学級」と呼ぶが、そうになっているだろうか。

逆に、教師の思い上がり（教えてやる意識）で「しじ（支持）」は「しじ」でも「先生の指示（しじ）通りに動かねばならない学校」「間違えると恥をかかされる学校」「自分を発揮したら損をする学校」等など…、これを『統制的風土の学校・学級』と呼ぶがそうってはいないか。

こんな学校で個性や主体性を発揮したら、とんでもない事態が待ち受けている訳で、子ども達は「黙っていたほうがいい」と殻に閉じこもることになる。

せめて校長先生の在任期間中は、「支持的風土の学校（学級）」づくりを目指して、リーダーシップを発揮してもらいたい。